

しむに至りては、齡三百年いくべき事と、養生論に委しく見へたり、上古の人は無爲無事にして、天地陰陽の道に叶ひ、身をたもつて命を盡し給へり、文選に身をおくに至りては理を失ふ、是を微にうしなふ、微を積て損をなし、損を積て衰をなす、衰より白を得、白より老を得、老より終りを得、悶として端なきが如しといへり、身の養生に至りては、其理を失ふ事、わずかにふしぎなる所より始て、其始終をしることなき故に、身おとろふる、すぐやかなる時くすざれば、病時悔る也、世の人のふるまひ平生は油斷有て、已に存命不定となり、俄に良醫を服すといへども治る事かたし、渴に臨んで井をほる事たゞに力を費す、あへて雪髪銀絲をまつ事なかれと、古人もいへり、かくはまき道ををしゆるといへ共、我身に保はまれ也、此翁若きより今に至るまで養生怠らず、故に二百餘歳を保ち來ぬ、何事も前方より用心なすべき事也と申されし、

〔鹽尻 四十一〕一金岡が繪道風が書傳へて寶とす、民安が散樂行景が鞠今見る事なし、晴明が卜、康頼が醫、其術家に傳ふ、されば能者の器物は形を傳へ、術者の事業は書に残りて、千歳朽せしなくもありや、其拙を傳ふるは、陸賈が武勇、其雄弁に不及、東坡が唱曲、其その文竟に加んや、石勒が基、和靖が基等、其拙をいへども其名をくだすべきかは、我人能もなく、又拙もなく、碌々として禽獸と群を俱にし、草木と同じく朽果なんは口惜しからずや、但し名を求るは又愚なるや、今難波に二井洞齋とて儒士あり、享保八癸卯年一百十六歳也、いと健かにして、住吉邊へは朝の間に往來す、されど強放にして世と戻り、人ごとにうとみ侍り、故其博學名もなく、不好の事のみ數へられ侍るとなん、都て長壽の者を見るに、殘忍の性質強暴の云爲ある人多し、是血氣の衰へなくして、命根長く侍るにや、慈忍柔和して好人と呼ぶ、人短命多し、

〔雲錦隨筆 二〕浪花堂島彌左衛門町、醫師杉本一齋翁は、去ぬる天保十二年辛丑、百廿七歳にして至て壯健也、友人と談話の形勢頗る元氣よし、最記臆強く眼齒ともによく、手足とも達者にて、日々